

『名無しの神様ご執心』

著:高月まつり

ill:明神 翼

「まだ私を神と認めんか、陽都」

「あんたは俺の足を治してくれた恩人だ。だから、その事実は信じる。祀れ崇めろというなら、俺ができる範囲でやるつもりだ。けどな……神様となるとなあ」

「この国は神と人間が密接だと聞いたが？」

男はラピスラズリの薔薇を慎重にデスクに置き、陽都に問う。

「神というか、万物には霊が宿るといふか……アニミズムは生活に密着してるから、改まって考えたことなんかない」

「では今から考えろ。私は、お前が信仰する神だ」

「いや、そんな断言されても」

「埒(らち)があかん」

男は苦笑を浮かべると、一度、手を叩(たた)いた。

次の瞬間、部屋に花びらが降ってくる。

淡い色をした花びらの雨。

何の花びらかなんて、日本人ならみんな分かるだろう。

桜、だ。

骨董で満たされた祖父の部屋に、桜の花びらが降り積もる。

ああ……なんて綺麗なんだろう……と、陽都はしばらく自分の体と骨董に降り積もる花びらを見つめた。

今はじめじめとした梅雨なのに、この部屋だけは春の優しい香りがする。

ノスタルジーを引き起こす淡い香りに、思わず涙ぐみそうになったところで、陽都は突如現実に戻った。

降り積もる花びらは美しいが……。

「これ、掃除するのは……俺かっ！」

陽都は自分に「俺以外の誰がいる」と突っ込みを入れた。

「掃除だと？ 美しいではないか。日本人は桜の花を愛しているのだろう？」

「そりゃ花見も桜も好きだけど……いや、こういう趣向は個人的には嫌いじゃないけど、後々のことを考えると、なんというか……」

それに、埃と花びらを一緒にして捨てるのは、なんだか悲しい。

陽都はたくさんの桜の花びらを頭や肩につけたまま、「いい加減にしろ」と男を睨(にら)んだ。

すると男は、今度は手を二回叩く。

部屋中にあった桜の花びらが、一枚残らず消え失せた。

瞬(まばた)きする間もない。

陽都は無言で、己の頬を強く引っ張った。

痛い。

寝てない。ちゃんと起きている。

「今のは？」

「お前が掃除をしなくともいいように、全て消した」

「え？ いや、おい、消したって……？ 消した？」

「これが神の力の、ごくごく一部だ。神にとっては兎(じ)戯(ぎ)にも等しいが、人間に対する説得力にはなる」

確かに。

超能力で済ますにはいろいろと無理がある。いや、無理なら最初からあった。リハビリしてもちゃんと歩くことができない足が、超能力とやらで治るはずはない。

理性は否定しているが、本能は認めている。

今まで祖父と一緒に世界を巡り、様々なものを見た。様々な人に会った。真贋入り乱れたバザールの中、騙(だま)す者と騙される者、嘘を見抜く者を星の数ほど見てきた。祖父も時折贋(にせ)物(もの)を掴まされて、悔しそうに唸(うな)っていた。そして陽都は、祖父が唸った十倍も唸ることになった。

おかげさまで目が肥えた。

その、肥えた目で目の前の男を見つめる。

陽都の目の前にいる、この美しい男は「神」なのだ。

もう否定できない。

「……その、神様が……祖父さんの部屋にずっといたのか」

「そういうことだ。ようやく信じたか。これからは私をきちんと敬うのだぞ？ 太陽の機嫌を損ねると、人間は困るのだからな。酒は欠かさずにな？ なんなら、一升瓶をここに置いていってもいい」

「あの」

「ん？ どうした？」

「……祖父さんの通夜と葬儀のとき………天気にしてくれたのはあんたか？」

突然の快晴は、祖父の人徳と言われた。

陽都もそうだろうと思っていた。

しかし今、目の前に「太陽神」を名乗る男がいる。

「興一は私のよき話し相手であった。彼を見送るのに、私がおらんでどうする」

男は、それが当然とでも言うように偉(ほ)そうに微(ほほ)笑(え)んだ。

「そっか。ありがとう。きっと祖父さんも喜んだと思う」

「喜んでいただ。もう意思の疎(そ)通(つう)はできんが、時折骨董を愛(め)でている」

人の魂は四十九日まで現世に留まると言われるが、陽都は、まさかその事実を今聞かされるとは思っていなかった。

「え、マジか？」

「神は嘘などつかんぞ。というか、つけん」

「死んだ後まで骨董を見てるなんて、祖父さんらしいや」

「まったくだ」

二人は顔を見合わせて小さく笑う。

「あんたは……ずっとここにいるのか？」

陽都がそう尋(たず)ねると、男は呆(あき)れ顔で肩を竦(すく)めた。

「ここに神体がある。この屋敷はすでに私の社だ。出て行く理由がない。さあ思う存分祀るがいい」

「あ、あの……もう一つ、いいか？」

「疑り深い信者だな」

「いや、そうじゃなくて……あんたの手、触ってもいいかな？」

「私は信者には寛大だ。畏(おそ)れ多いこの手に触れるがいい」

陽都は、男が差し出した手を両手でそっと掴む。

人の形をした幻ではない。温かな人の手だ。関節の皺も爪もある。

これもいわゆる「神の奇跡」なのか。

「神様は……その、アレか？ 人間の形をしてるときは、人間と同じものを食べたり飲んだりするのか？」

陽都は男の右手を握り締めたまま、矢継ぎ早に質問する。

ずっとここで暮らすなら、衣食住の話は必要だ。

「誠心誠意祀られていた頃は、酒以外の人間の食事にさほど興味はなかったが……今は違うぞ。この国の料理は美味だな。酒も素晴らしい。特に日本酒。私は日本酒が一番好きだ。この屋敷には、素晴らしい腕を持つおなごがいるだろう？ お前の姉の一人。たしか、花梨と言ったな。これからが楽しみでならん」

キラキラと輝く笑顔を見せる男に、陽都は「本当に……何でも知ってるんだな」と呟いた。

「知っているだけで何もしておらん。お前たちは私の信者ではなかったからな。だが今は違う。私は、今までのように見守るだけでなく『信者のお前』を守っていこう」

「神様って……人間が願ってから願いを叶(かな)えるもんじゃないか？」

「は？」

男は眉間に皺を寄せ「願いを叶えるだと？」と不機嫌な声を出す。

「神様ってのはそういうもんだろ。だからみんな参拝に行くんだ」

「恐れ敬われてこそ神だろう。なぜいちいち人間の願いを聞く必要がある？ 願うなら、少なくとも、家畜や生(き)娘(むすめ)の生(い)け贄(にえ)を捧げてからだろうが」

なんだよこの神さまは……。

陽都は心の中で突っ込みを入れる。

「ああ忘れていた。今の世界に生贄は存在しないのだったな」

「思い出してくれて幸いだ。多分、祖父さんからいろいろ聞いてると思うけどさ」

「荒ぶる神の話はなかなか楽しかった。私も昔は、何度か荒ぶって見たことがある。太陽という手前、禍(まが)々(まが)しいことはできなかったが」

それやったら崇(たた)り神ですから。太陽が崇るって日照りか？ 日照りしかないだろ。最悪だ。

陽都はまたしても心の中で突っ込みを入れ、微妙な表情を浮かべた。

「日本では私は客のようなものだからな。アマテラスがいる手前、天変地異は起こせん」

「起こすなよ。やめろよマジで」

アマテラス、まじアマテラス様……っ！

陽都は輝く女神に、心の中で頭を下げる。

本文 p41～47 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>